

「吾妻山 ～自然と人と～」 展示資料解説

※実際の展示順とは必ずしも一致しません

※一部、実際には展示されていない資料があります

吾妻山の自然と生きものたち

吾妻の山へ 吾妻山ガイドマップ (当館蔵 K689/ヨ)

米沢市観光課の作成。吾妻山の主な登山ルートや山小屋、所要時間の目安などを地図に描いている。吾妻山の山々の位置関係や距離感が良く分かるマップといえる。地図の裏面には季節ごとにみられる山野草や登山の心得などが記されている。

「銀白の大猿を吾妻山中で生捕る」(よねざは 昭和13年4月3日付3面。当館蔵)

吾妻山で白猿が捕らえられたことを伝える新聞記事。南原村の青年が熊狩りの最中に発見し捕らえた、と伝える。この猿はその後上野動物園に引き取られたが間もなくして死んだという。動物文学を確立した人物として知られる戸川幸夫の作品「吾妻の白サル神」はこの出来事から取材している。

(写真) 吾妻の白サル神 (当館蔵 K91/ト)

戸川幸夫著。戸川は動物を主体とした「動物文学」を確立した人物として知られる。表題作の他、カラスとカモシカを主題とした作品が納められている。

西吾妻山の白猿 (ポストカード。当館蔵)

昭和56年(1981)作成。白猿の姉妹などの写真をポストカード化したもの。ケースに記された遠藤亨氏のコメントによると、昭和13年の発見以来久しく確認されなかった吾妻の白猿がこの頃になって再び姿を見せるようになったらしい。

吾妻大火山彙見取図集 (当館蔵 K453/K)

明治43年(1910)以降の吾妻の山々を描く。噴煙があがっている様子を描いたものも見られる。作者は「火山居士」と記されているが不明。しかし、後年に『有為会雑誌』262号で小泉自身が記した吾妻山調査の日程と行程が本資料に記されたものと一致することから、この「火山居士」は小泉源一である可能性が非常に高いと考えられる。小泉は米沢出身で京都大学教授を務めた植物学者として知られているが、『有為会雑誌』には小泉によって吾妻山を主題に、学問の分野を超えた幅広いテーマの論文が長年にわたって掲載されている。

(写真) 吾妻岳噴火実見火図 (当館蔵 興譲館キ 83-2)

明治 26 年 (1893) 出版。福島側からみた吾妻山の噴火の様子を描く。一切経山と吾妻小富士の間から噴煙が激しく立ち上っている。左上の文章には、同年 5 月 19 日の噴火の際には矢筈にあった温泉場の建物に被害があったが、幸いに人的被害はなかった旨が記されている。しかし実際には、当時火口周辺を調査中だった 2 名が噴石にあたり亡くなった。

吾妻のマタギ (『米沢文化』5 号。当館蔵 K051.1/ヨ/5)

昭和 47 年 (1972) 発行。吾妻山北麓の綱木集落の人びとによる熊猟の様子を写す。毛皮や熊の胆などが珍重され、かつては吾妻山の各地をマタギと呼ばれた猟師たちが活躍していたが、この時点では綱木にその名残が伝わるのみだ、とする。

吾妻山と民話の世界

米沢の民話 (当館蔵 K388/Yo)

昭和 37 年から 39 年にかけて「米沢民話の会」から発行された会誌。置賜地方を中心とした各地の民話が納められている。本展では「白布高湯の起り」と「吾妻山三題」と題された文章を紹介する。米沢民話の会の中心人物の一人・武田正は当時 30 歳代。米沢東高の教諭だった。武田はその後も地方の民話研究を続け、今日では置賜民話研究の第一人者として知られている。米沢民話の会は昭和 39 年に発展的解消し、新たに結成された置賜民俗研究会へ合流した。

牛の涎 (当館蔵 K388/Ta)

昭和 39 年 (1964) 発行。米沢民話の会による民話目録第 2 号。ここに収められた「朝日沢の大鱗」には、南原の浅間五右衛門が吾妻の朝日沢で出会ったという大鱗 (おろち) について記されている。

切支丹の幻術 (当館蔵 K388/Ta)

昭和 37 年 (1962)、武田正・編。吾妻山の麓に住む老婆の飼い犬に自分の飼い犬を殺された男の復讐の話「猫股」が収められている。終盤まで奇想天外な場面が連続するが、最後の描写は今日の視点からは非常にあっけなく感じられる。

吾妻山と信仰

吾妻山物語（『有為会雑誌』262号。当館蔵 K051/ヨ/262）

大正5年（1916）、この年に理学博士となった小泉源一の筆。かつて吾妻山の中に大日岳と呼ばれた山があったことと、周辺の大日如来信仰との関係性について論じている。また、砂盛山は天狗が角力をとる場所と伝わる、としている。専門分野にとらわれない、小泉の吾妻山に対する関心の深さがうかがえる。

（写真）「吾妻山頂に権現堂を建立」（米沢新聞 昭和5年4月15日付1面。当館蔵）

吾妻山の天狗岩に機業家の佐藤徳助が権現堂を建立予定だと伝える。徳助のコメントとして、慶長年間に直江兼続が山頂に吾妻権現を祀る神殿を建立したがいつの間にか廃れてしまったという伝承が記されている。今回讚仰会を組織して米沢から会員を募りお堂を建立することになった、とする。

（写真）「落成した吾妻の神社」（米沢新聞 昭和5年8月10日付2面。当館蔵）

前出の記事の続報として、天狗岩の上に吾妻神社が建立され、地鎮祭などが執り行われたことを伝える。記事には賛同者の名前も記されている。

（写真）（吾妻神社絵葉書）（米沢市上杉博物館蔵）

吾妻神社建立を記念して作成されたと思われるポストカード。前出の米沢新聞に掲載されたものと同じ写真も使われている。

不忘山（当館蔵 K175/ア）

吾妻神社奉賛会の会誌。昭和62年（1987）の創刊。昭和初期に建立された吾妻神社への参拝が長きにわたって続けられてきたことを伝える。蛇足ではあるが、現在のお堂は昭和58年（1983）に再建されたものである。

憩いの地 吾妻山

小野川みやげ（当館蔵吉田家文書 173）

米沢藩士・吉田綱富が文化14年（1817）1月に小野川温泉を訪ねた際に見かけた「鉄砲舞」なる踊りの文句を記したもの。この序文に、友と約した小野川のみやげに伸びすぎた豆もやしも如何と思ひ、唄の文句を記して贈ることにしたとある。小野川の伝統野菜として知られる小野川豆もやしの栽培の歴史を伺う上でも貴重な記述であるといえる。

ここに記された「鉄砲舞」なるものは弥兵衛宅に宿した吉田の隣部屋に滞在していた原方衆の若者と思しき団体が踊っていたもので、吉田は腹の筋がよじれるばかりに可笑しかったと感想を記し、米沢に帰った後に東町のキタという女性に踊ってもらったところ「毘沙門天といえども笑う」程に皆の腹の筋がよじれた、と記す。吉田はよほどこの踊りを気に入ったのか本資料と同様の記録を複数作成したようで、その一つをもとに水野道子氏が昭和 57 年（1982）に「鉄砲舞」の書きとめについて」と題した論文を『芸能史研究』第 79 号に発表している。

（パネル）「甘糟春女塵塚日記」より（『米沢市史編集資料第三号』収載）

米沢藩士・甘粕家の子女・春が慶応 2 年（1865）に記した日記に、白布温泉に会津藩士が訪れていたことがわかる記述がみられる。ある日、白布温泉に来た会津藩士が「江戸で大事件が起こった」との知らせを受け、あわてて帰ったところ、後日になってその大事件は聞き間違いだった、と分かったのだという。国境に関所はあれど、人々はわりあい自由に行き来していた様子が想像できる。スカイバレーなど無い時代ゆえ、会津からは桧原～綱木～関～白布といったルートを使ったのだろうか。

（パネル）『上杉家御年譜』より

藩主上杉家の公的記録にも、上杉家の人物が吾妻山へたびたび出かけた記録がみられる。嘉永 2 年（1849）には主水こと勝応（斉憲の従兄弟）が、万延元年（1860）には世子こと後の藩主茂憲が吾妻山でタケノコ採りをした、とある。このタケノコとは、「アズマタケ」とも呼ばれるチシマザサのことだろうか。兎に角、江戸時代においても吾妻山はタケノコの名産地だったことがうかがえる。

（温泉絵葉書）（当館蔵 K291/オ）

当館所蔵の絵葉書から、滑川温泉と小野川温泉の絵葉書を展示した。画像や文字の配置などからしてどちらも大正期から昭和初期にかけて作成されたものと推測できる。

『太陽』5 卷 14 号（当館蔵 K051/タ/5-14）

日本初の総合雑誌として知られる『太陽』の明治 32 年 6 月発行号。逓信大臣などを務めた政治家・末松謙澄による漢文調の紀行文「東北紀遊」に五色温泉や板谷駅など吾妻山周辺に関連した写真が添えられている。本号発行の前月に奥羽本線の福島米沢間が開通した。開通直後の鉄道を利用した旅であったことがうかがえる。

写真の撮影者は米沢出身の編集者・大橋乙羽。雑誌『太陽』の編集も手掛けた。

(温泉図) (当館蔵甘粕家文書 584)

米沢藩士・甘粕家に伝来した。赤湯・小野川・白布温泉の鳥瞰図となっているが、いずれも幕末の安政年間に発行されたガイドブック的一冊『東講商人鑑』に掲載された画を模写したものの。原画と比べて小野川に「湯出口」の文字が追加されている点や、白布の地形がより詳しく描かれている点など、模写した人間のちょっとしたこだわりが感じられる。

白布高湯大滝之図 (当館蔵甘粕家 1371)

米沢藩士・甘粕家伝来。筆墨で描いた線に着色を施す。作者は定かでないが、迷いのない筆致は描き慣れた人物の作と感じさせる。白布大滝は現在でも観光スポットとして参道などが整備されている。

国境としての吾妻山と行きかう人々

自城下入口至会津領檜原村道中絵図 (当館蔵岩瀬家 558)

歴代にわたり米沢藩絵図方を務めた岩瀬家に伝来した。米沢城下から会津・檜原村への道とその周辺を描く。綱木村に設けられた番所を越え綱木川沿いを進み、小峠・大峠を経て国境に至る。制作後に修正を施そうとしたのか、黒墨で道や地形を書き直そうとした箇所がみられる。

綱木駅会津嶺及檜原嶺間図 (当館蔵岩瀬家 557)

岩瀬家伝来の絵図。綱木集落から会津との国境に至る範囲の地形や道を描く。綱木川に注ぐ沢の一つ一つに名前が記されている点からは当時の暮らしにおける山の重要性が想起される。

本紙最上部に描かれた国境に至る、赤色の道が四本描かれていることがわかる。一番右側に門が描かれている道が正式な街道なのだが、複数の間道（抜け道）があったことがうかがえる。

雲の中をバスが行く (当館蔵 K685/N)

昭和48年(1973)、米沢新聞社発行。戦時中に木材搬出のために造られた林道が一大観光道路「西吾妻スカイバレー」として開通するまでの歴史をつづる。

(西吾妻スカイバレーパンフレット) (当館蔵 K685/ニ)

昭和36年(1961)の道路開通以後、複数のパンフレットが作成された。本展では開通直後の昭和38年と、舗装工事の末有料道路とし完成した昭和47年に作られたパンフレットを展示した。

吾妻山を登る・滑る

吾妻登山案内（当館蔵）

大正 14 年（1925）、南置賜郡教育会の発行。序文などから、初の吾妻山登山のガイドブックとして制作されたことがわかる。「登山の準備」からはじまり、「白布高湯口」「滑川姥湯口」「板谷五色口」の各登山ルートを案内する。本資料の表紙には昭和 4 年（1929）と考えられる登山記念のスタンプが押されている。スタンプは白布温泉東屋旅館の作。

吾妻登山の葉（当館蔵）

昭和 14 年（1939）の『有為会雑誌』に掲載された小泉源一「吾妻火山彙」に続く形で綴られている登山のしおり。米沢駅前集合の一泊二日の行程で一切経山を目指したことがわかる。記されている登山の仕度や心得の多くは大正 14 年発行の「吾妻登山案内」のものと共通している。

あづま（米沢山の会創立 50 周年記念。当館蔵 K786/A/14）

平成元年（1989）発行の米沢山の会創立 50 周年記念誌。これまでの活動記録や、過去の会誌に掲載された文章などが収められている。近代登山の歴史とともに、山の会による吾妻山登山道の開拓・整備の歴史をうかがい知ることができる。

あづま（当館蔵 K786/や）

米沢東高校山岳部の部誌。昭和 58 年と 63 年に発行された特集号を展示した。特集号は OG による思い出や、現役部員の活動記などが収められている。吾妻山縦走や冬の飯豊山など、本格的かつハードな登山に挑んでいたことがうかがえる。

米沢のスキーよもやま（米沢スキー連盟創設 60 年記念誌。当館蔵 K784.3/ヨ）

昭和 58 年（1983）発行。明治 44 年（1911）、五色でスキーが行われてからの米沢のスキーの歴史がうかがえる一冊。

（写真）吾妻登山（上杉博物館蔵）

白布温泉の太田屋発行の絵葉書。袋からは登山記念のお土産として作られたことがわかる。吾妻山各所の名勝などの写真から成るが、天狗岩の上に何も無いことから、大正時代に撮影されたものと推測できる。今日の視点からは、ほぼすべてに見知らぬおじさんが写っているポストカードに需要があったのだろうかと思ってしまう。

(写真) 従遊吾嬬山記 (上杉博物館蔵 上杉文書 1470-3-6)

天保6年(1835)5月27日から28日にかけて行われた、後の米沢藩主・上杉斉憲の吾妻山登山を漢文調に記したもの。作者は斉憲小姓の小見誠助。斉憲は当時数え16歳。斉憲と家臣7名による一行は大沢から滑川温泉付近を探訪して五色温泉で一泊し、未明から高倉山を目指したようである。その後滑川の大瀑布なども訪れたようだが、伝聞と実際の行程の文章が入り交じり、実態の解明は困難である。読みようによっては28日に吾妻小富士まで赴いたようにも受け取れるが、日程的にはかなり難しいようにも思われる。

とある地点から福島方面を眺めた斉憲は「(意識) わが祖先が伊達の軍勢を破った戦場が一望の下にあるぞ。どうして懐かしく思わないだろうか」と慶長年間の松川の戦いを引き合いに出して感想を述べたところ、それを聞いた家臣は「皆慨然」したとある。慨然とは辞書によると「憤り嘆くさま」もしくは「心を奮い起こすさま」とほぼ正反対の意味が記されているが、本資料ではどちらが適当なのだろうか。

(写真) 吾妻登山日記 (上杉博物館蔵米沢新田藩主家資料)

上杉勝憲による吾妻山登山記。勝憲は明治19年(1886)上杉茂憲の四男として生まれ、同31年米沢新田藩主家の養子となった。本資料は米沢中学4年生時の明治35年前後に書かれたものと推測される。白布から西大巔に至り、下山後白布温泉で一泊するまでを荘厳な文体で記す。

教師からは朱字で「着想稍々可也。然れども誤字あり注意せよ」との指導と「甲下」の評価が付されている。

心の中の吾妻山

米沢市の木 こめつが (当館蔵 K318/ヨ)

米沢市政90周年を記念して、昭和54年(1979)に公募で決定した市の木「こめつが」の図案の原画。こめつがはマツ科ツガ属の常緑高木で日本固有の種。吾妻三大針葉樹の一つとされる。原画の作者は川村利三郎。川村は明治43年(1910)長井市出身。上野松坂屋図案部や宣伝部などで勤務。後に米沢工業試験場に務め、多くのデザイン・イラストを創った。作品集に『米澤のマルチデザイナー 川村利三郎』がある。

米沢市の花 あずましゃくなげ (当館蔵 K318/ヨ)

こめつがと同じく昭和54年(1979)に市の花として制定された「あずましゃくなげ」の図案の原画。ツツジ科ツツジ属シャクナゲ亜属の常緑低木で、西吾妻山などに自生している。前出の資料と本資料を原画とした図案が現在、市HPに掲載されている。

吾妻（当館蔵 K379/A）

国立米沢療養所の入所者による吾妻療友会の会報。会の事務報告の他に、随筆や短歌、川柳なども掲載され、入所者の交流の場として機能していたことがうかがえる。

あづま（当館蔵 K051/A）

置賜在京学生会の会誌。創刊は昭和38年（1963）と推定される。井熊征一氏による創刊号の巻頭言には、在京学生の意見、研究、創作を自由に発表するために本誌を創刊したとある。雑感、研究レポート、小説など幅広いジャンルの文章が掲載されている。

置賜在京学生会は置賜出身で関東在住の学生の親睦を目的に昭和37年発足。事務局は東京興譲館におかれた。

吾妻（当館蔵 K376/よ）

昭和59年（1984）発足の米沢東高社会部の部誌。顧問は武田正。米沢の歴史や文化、伝承などを調査してまとめている。創部一年目は「米沢の武家文化」、二年目は「米沢と水」を主題として調査に取り組んだことがわかる。

吾妻おろし（当館蔵 K051/Ya）

昭和32年（1957）創刊。米沢市の山形新県政出版社の発行。教育関係者、医療関係者、各種団体の長などによる随想や提言などを収める。編集後記には「文筆を業としない、いわゆるこの方面では素人の方々の持論や意見を集めて一冊の書にまとめる」とある。「吾妻おろし」とは吾妻山から福島方面に吹き下ろされる季節風を指す。世の中に新風を吹き込もうとした編集者たちの気概が感じられる。

米沢地方の童謡集 第三号（当館蔵 K388/Yo/3）

昭和25年（1950）、米沢高校郷土研究クラブ発行。クラブの顧問は吉田義信。本号は置賜のわらべ歌を蒐集・分類して掲載している。その中に「秋の夕方、真赤にやけた夕空をみあげながら」歌うものとして、吾妻山を入れ込んだ歌が収められている。

かあらすかあらす 後のかあらす前になれ 吾妻の山 焼げるから 早やあぐ いそげ

（文責 郷土資料担当 宮澤崇士）